

## ふん尿処理施設の経営的評価に関する調査研究

今年の4月から自動車税もグリーン化されるなど、環境に対する意識が社会的に高まってきています。畜産分野においても環境3法の施行から2年が経過しようとしており、国内の生産農家や関係機関が一体となってクリーンな畜産経営の確立に向けて取り組みが行われています。

栃木県においてもふん尿処理施設を新たに整備する農家が多くなってきていますが、新たな投資が生じるため経営に与える影響が懸念されています。そこで、畜産試験場では、ふん尿処理施設の適正規模や施設設置における適正投資額等について、経営モデルを用いて検討しています。

近年様々なタイプの家畜ふん尿処理施設が販売されるようになりましたが、施設の設置費用やランニングコスト（電気代、資材代等）は、あまり収益につながるものではないにもかかわらず、全体的に高額です。（表1）

表1 施設別設置費用（施設の減価償却費＋ランニングコスト） 単位:千円

区分	A社	B社	C社	D社	E社	F社	H社
種類	スクープ	密閉縦型	ロータリー	ロータリー	加圧混合	エンドレス	ロータリー
乳牛50頭	2,536	1,913	1,292	2,893	4,756	3,320	1,402
肥育牛200頭	2,922	1,780	2,167	3,370	4,589	-	2,700

「家畜ふん尿に関する研究会資料より抜粋」栃木県畜産会

図1には酪農を例にとり、搾乳牛40頭経営における乳量と余剰金（施設投資の資金源）の簡単な試算をしてみました。表1と比較してみると高額な施設を導入するために必要な乳量がわかります。

また、金銭的な面以外に、設置スペースや作業時間によっても導入できる施設の種類の限定されてきます。

試験場では、このように畜産環境対策について経営安定の視点からも調査研究を進めているところです。

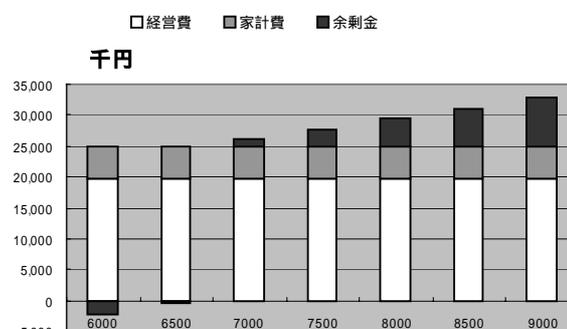


図1 乳量水準と粗収入に占める経費の割合 (県経営診断指標より試算)